

中之島剣先公園モニュメントを作ったアーティストが思う 世の中の動向 -STEP-upセミナー講演録-

岡本覚¹

STEP-up セミナーの第4回として、株式会社ビーの岡本覚さんにお話し頂きます。岡本さんはガラス作家としてだけでなく、地域のためにガラスを役立て、特に社会的弱者についても何か提案していきたいと、広く活動されています。今回はそのお話を伺う機会となりました。

1. 大阪はガラス発祥の地



大阪はガラスの発祥の地です。ガラスというのは、コップのような既製品がいきなりできるわけではありません。ガラスは、真っ白い土「珪砂（ケイシャ）」を使って作ります。珪砂を鉛入れに入れて、1500度から1600度ぐらいの熱で一晩中熱すると、ドロッと溶けます。それがガラスです。その溶けた状態のものを吹いて加工すると、ガラスのコップなどになりますし、のぼしたら窓ガラスにもなります。ガラスを発達させようとする、そのもつをつくらないと発達しないわけです。

長崎にはモノ（既製品）が伝わりましたが、それらを作る製法は伝わりませんでした。製法とは基本的に、大量生産をしないと技術が発達しません。やはり大阪は江戸時代から商いの中心なのでしょう。珪砂をドロドロに溶かす技術があって、ガラスが発達してきたのです。大阪はガラスのもつと根幹の部分をやっている、そう思います。天満はそういう場所なのです。それを私はすごく誇りに思っています。

天満界限には、ガラス工場がたくさんありました。それは町の中に直接原料が手に入る場所があり、ガラスの全てが集中されていた場所だったからです。1979年ごろ、テレビで見ると、ガラスを吹いている工場やガラスを磨くところがいくつもありました。亀井さんという大きなガラス工場がありました。それが最後のガラス屋だったと思います。今は、ど

¹ 株式会社ビー代表取締役

ここにも工場は残っていません。

興味深いのは、私には北海道から沖縄までいろいろ提携先があるのですが、みなさん大阪弁なのです。どういうわけか、ガラスの世界は大阪弁ばかりです。小さな工房では無理な技術も、工業化したからできることがたくさんあります。大阪だったから、それができた。原料となるものを売る会社があり、大量生産ができていたから、大阪は工業都市としてのびてきたのだと思います。だからガラス業界は沖縄、東海、東京、どこでも大阪弁なのだと思えます。

2. ガラスとの出会い

昭和30年、私は天下茶屋に生まれました。大阪の「釜ヶ崎」というところで、次男坊で3人兄弟の1番弟です。小さい頃から、家の前にガラス屋、左に鍛冶屋、右に大工がいました。親が私に買ってくれるのはダイヤモンドガラスカッターなどの工具のみ。既製品は買ってもらったことがありませんでした。親には「おもちゃは自分で作れ」と言われ、自分でガラスを切って、いろんなものを作っていました。私は大工が使う大きなハンマーで小さな釘を打つこともできるという、器用な子どもでした。

あまり勉強が好きではなかったのですが、いろいろやりたくて、アメリカのオハイオでステンドグラスの技術を学びました。私が天満になぜ来たのかというと、たくさんガラスを加工している工場があったからです。そして「天満限界が大阪ガラス発祥の地」というのを聞いて「ええなあ」と思って、ステンドグラスの工房として事務所を開きました。1979年のことです。日本では、初めてのステンドグラス工房だったと思います。当時の日本にはまだ、ランプシェードとか、ティファニースタイルという、アメリカンスタイルのステンドグラスというものはなく、私とその技術を持ってきました。ステンドグラスに関する本を色々翻訳したり、カルチャーセンターで教えたりしていました。

当初は、ガラスだけでは食べていけないので「どうしようかなあ」と考えていたところ、「ステンドグラスを教えたら食えるんちゃうか」という考えに至りました。1番印象深い思い出は、リーガロイヤルホテル（昔のロイヤルホテル）で教えていた時のことです。学生が「飛行機の時間があるので、どうしても今日は早く帰らないとダメなんです」と言うので、私が「どこから来られているんですか」と尋ねると「九州」と答える。そんな状態でした。

当時は、ほとんどステンドグラスの教室が無くて、ましてやティファニースタイルという立体を作る技術がなかった頃です。いろいろガラスの教室をしましたが、後になってステンドグラスをやる人がどんどん増えました。今では、「特許を取っておけばな」と後悔しています。それ以後、私がやること全部に特許を出しています。そういった経験を経ながら、今は、アーティストとして、また大阪府立大学の研究員、大阪工業大学の客員教授として、障がい者の方との活動などを行っています。

3. 中之島剣先モニュメント



天神橋1丁目を越えて、さらに天神橋を越えると、このようなモニュメントがあります。大阪市のコンペで作った作品で、ガラス発祥の天満に住んでいるのにコンペで負けたら「引越せなあかんやん」と思って、必死になってやりました。地域の方からは「何かわからへん」って言われて、ものすごく辛かったことがあります。イメージは、船なんですけどね。川の多い大阪では船も多い。それに加えて、天満はガラス発祥の地なので「ガラスの船」にしました。モニュメントの中央がマストです。正面から見たら大阪市のマークに見えるようにしています。以前、地域の方から、「ガラスの船を作ろう」というお話を頂いたことがありますが、「ガラスは重たいので沈んだらどうしましょう」ということになりました。ガラスの船は水に浮かぶことは浮かびますが、重たいので沈んだら引き上げるのが大変なんです。普通の船はひっくり返っても浮くようになっていますが、ガラスだけはどうしようもない。でも、モニュメントの船なら沈まない。かなりカッコいいので、1度船に乗って川から見てください。戦艦とか帆掛け舟とか、見る人によっていろいろな船に見えるようデザインしています。アーティストなのでイメージだけは作って、あとはみなさんに判断して頂けたらいいなと思っています。

3. ガラス作品

〈モニュメント〉

マンションの入口や庭にあるモニュメントや、企業の敷地に設置するモニュメントなど、依頼を受けて制作しています。



これは箱根の彫刻の森です。ウエディングドレスのデザイナーと一緒に仕事をさせていただいた時のものです。この自然の中で結婚式を挙げたら素敵だろうと思って制作し、「妖精のチャペル」と名付けました。なかなか好評をいただいています。

こちらの作品は、発光ダイオードなどを作っている化学工業の中庭になります。「リュウノヒゲ」と名付けた作品です。



龍が土の中で上へ下へと動き、地中に潜ってひげだけ出しているというイメージです。長く、作品を作り足すことができるようなイメージでやっています。



大阪市にある大型団地に設置した作品です。ガラスのモニュメントの中に赤青のラインが見えます。散髪屋のサインポールのように静脈と動脈をイメージし、3体合わせて「家族」を表しています。私はアーティストとして、いつもこういったことをイメージしています。これは、石とガラスの組み合わせで制作しており、年数と共に錆石という石がどんどん赤く変色していきます。年数と共に、お父さん、お母さん、子どももみんな変わっていくということを表現しています。



こちらは、宝飾業界の店舗です。この場所は海水を被るのですが、ガラスのエッジというのは、不思議なことにあまり汚れません。10年間、外側を掃除しなくても大丈夫です。

他にも、天王寺や心齋橋などに作品があります。ある店舗では、店内に8mものモニュメントを設置していました。その作品は天井から床まであるもので、作品の両脇をステンレスで支えていました。技術的なことを言うと、このステンレスを曲げるのが大変で、最終的にはジェットコースターを作成する会社をお願いしました。私は大雑把なように見えますが、建築物を考える時は計算して許可を取る必要があります。耐地震や耐風圧などで打算是だめなのです。残念ですが店をたたむことになり、私の手には負えないので壊しました。

女性のヌードをイメージした作品もあります。イメージがつきにくいかもしれませんが、依頼を受けた場所は女性が多く集まるビル。昔、尼寺があった場所だと伺ったので、もっと詳しくストーリーを聞いてみました。ビルのオーナーも、女性が集まる場所にしたいと希望されました。見る角度によっては、女性の体に見えたり、そうではなかったりという、作家の遊びどころになっています。全く同じ勾玉の形をしたガラスを重ねているだけですが、何枚も重ねて、微妙にずらしていくと表情が出てきます。

他には、結婚式場のスタンドガラスも手掛けました。遠くから見ると、普通のスタンドガラスに見えますが、実は1つ1つのガラスが立体的になっています。普通、スタンドガラスはペラペラの平面ですが、立体になっているものを作りました。近寄って見ると、ガラスの棒や塊など、いろいろなものが放り込まれています。以前はよく、テレビコマーシャルとして使って頂いていましたが、作家の名前は出ないので寂しいところです。でも Facebook をやり始めた時に、この結婚式場の式場長から「スタンドガラスを作って頂いた岡本覚さんですよね」と連絡がきたことは嬉しかったです。

〈リードベール：界面結晶化ガラス〉

私が発明した界面結晶化ガラスです。カーテンのように透けて波打っており、向こう側が見えるようで見えない。大阪市立大学の中でも使っています。リサイクルガラスで、階段のステップなど、いろいろな場所に使いました。大学以外では、ホテルでも利用しています。地面に敷いて上を歩くようにしていますが、水の上を歩くような感じになります。

建物ばかりではありません。意外なものでは、お墓があります。私のことを聞きつけて、

静岡県の方から依頼を受けました。「どんな場所ですか？」とお伺いすると、「富士山が良く見える」と言われた。「一度現地に行きます」という話になって、行ってみるとすごく景色がいい。ガラスに富士山を映して、「逆さ富士にしてもよいですか？」と聞いてみると、「任せます」というお返事。取りかかって分かったことは、東京のお墓には形や高さなど、さまざまな制限があるということです。息子さんが亡くなられたり、奥様が亡くなられたりして、話が止まってしまう時期がありました。しばらくして、やはり私に作ってほしいというお話をいただき、制作を再開することになりました。

できて見るとすごくきれい。夜になると光ります。蓄光（ちっこう）と言って、光をためる物質を入れています。お墓って、真っ暗でしょう。でも、このお墓は墓石だけが明るいです。でき上がりを依頼主に見ていただいた時は、本当に喜んでくださって、写真も送ってくれました。朝から晩までお墓に通われているようで、「夜も光るよ」って連絡をくれるのです。蓄光は毎日、昼間の太陽を受けると、大体夜10時くらいからぼーっと墓石が光ります。朝になったらまた蓄光するというのを繰り返すのです。

このリードボールができた時は、私はピカソに並んだと思いました。とても難しい技術ですから、誰にも負けないという自信にもなりました。マンション名を入れたモニュメントや、お菓子屋のケース部分などでも活用しています。



〈ガラス書〉

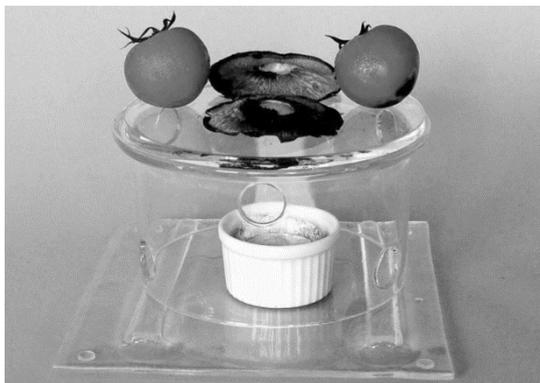
ガラスに書を書く。今はもう「ガラス書」がどのようなものか、皆さんご存じだと思います。

す。「天満宮は書の神様，天満はガラス発祥の地，融合するとガラス書になる」という発想です。「もっと広めたい」そう思っています。ガラス書は，いろんな書家さんに書いてもらいたいと思っています。サントリーミュージアムでガラス書の展示会に行ったこともあります。



〈五感を働かして飯を食う〉

ガラス焼きというのもしました。ガラスでご飯を食べたらおいしいというもので，ガラスの上に食材を載せて，下から炎で加熱します。食材が炎で焦げていくのを見る，これが楽しみなんです。河原でアユを焼いた時，美味しそうな香りがするでしょう？ あれは，極限だと思っんです。今の調理方法って，電子レンジで「チーン」するなど，火が見えないでしょう。炎を見ながらご飯を食べさせたいな，と思って研究をすると，ガラスは遠赤外線が出ることが分かりました。遠赤外線が出て，非常に硬いお肉でも柔らかく焼けるのです。「五感を働かして飯を食おう」，私はアーティストとして，これを提案しています。



実は，これは使ってみると不便なものです。食材を載せるのに，ちょっとでも汚れたら気になる。だから，なかなか実現面では難しい。レストランでも，汚れを取るのが大変みたいです。鉄板や石は汚くなくてもあまり気にならないですが，ガラスはきれいでないといけません。ある企業に問い合わせしてみると，そのぐらいの汚れは実際きれいに取れると言う。ただ，店でやるとなると，ちょっとのごみが出るなど合わないことが出て来る。これを家庭でやるとなると，ものすごく良いのですが，ひとつ困ったことがあります。それは，みんながガラスに触ってしまうということ。ガラスは熱いというイメージがないので，触ると「あちちっ」となる。冷たいと思い込んで，すぐ触ってしまう。ガラス焼きで調理すると本当においしい

のですが、「火傷をする人がたくさんいて大変だろうな」と思います。そういうことで、今、この計画は止まっています。

4. ノーベル平和賞を取るための第一歩

〈廃棄ガラスの現状〉

ワイン瓶はリサイクルができません。実はごみです。茶色と透明の瓶はまた瓶に戻すことができますが、色つき瓶は戻せない。ドロドロにとけたガラスの中に、金を入れるとピンク色や赤になります。鉄を入れるとグリーンに、銅を入れると黄色になる。例えば、緑と黄色を混ぜてしまうと黄緑になりますが、他の色がだんだん混ざってくると黒になります。絵具は、いろいろな色を混ぜると真っ黒になってしまうでしょう？それと同じです。一回、色を入れてしまうと、なかなか脱色は難しい。同系色に瓶を分類しても、それらをリサイクルすることは難しいのです。

瓶のリサイクルの時に、「緑系の瓶」という分け方ができたとしても、同じ色の瓶に戻すことは難しい。一口に「緑」と言ってもさまざまな色があります。瓶を作るメーカーが必要とする、オリジナルカラーの緑のピンは「この色」というのがありますから。

今は茶色と透明以外は、全部埋め立てられてごみ扱い。しかし、「ちゃんとガラスの破片は埋め立てに活用されています」という言い方しかされません。ガラスは、埋め立てても人体に有毒なものが出ないのです。普通の産業廃棄物は埋め立てると何が出るか分からない。しかし、ガラスは安全だから「埋め立てに活用させて頂いてますよ」という言い方がされるのです。

〈ガラスおこし〉

ガラスおこしは、廃ガラスを使って作ります。ガラスおこしを作るのは楽しいですよ。ぜひ、子どもたちにさせてあげたい。瓶を持ってきてくれたら、粉砕機を使って簡単に潰すことができます。ただ、瓶の色分けをするだけでは面倒で嫌になるけれど、瓶を自分で実際に割って、ガラスおこしをすると、やりたくなる。なかなか瓶を割るなんてことはないでしょう？割ったすぐのガラスは、まだ危ない。割った後は、シェーカーに入れてシェイクします。そうすると角が取れて、危なくないガラスになります。みんな勘違いをしています。本当は、ガラスとは危なくないものなのです。ガラスは強いから、薄くのぼすことができます。そして、いろんな瓶があるので、ガラスの絵の具ができます。化粧瓶などは、黄色や赤もあります。砂絵と同じですよ。普通のガラスを作るには1400度の温度が必要ですが、ガラスおこしは800度でできます。全然難しくない。800度とは、煙草の温度ぐらいです。とても温度の低い窯業で言うと1番低い温度です。それでも焼けるので、いろいろ広げたいと思ってワークショップも行っています。



普通のコースターは水でダボダボになりますが、ガラスおこしのコースターは水を吸いますから、そんな風にはなりません。今、京都の作業所でガラスおこしを作っていて、実際に商品化しています。知的障がい児の作業所でプレートを作っているのです。30cm角のプレートを作って、路盤材になっています。建築強度も大丈夫ですし、道路強度も大丈夫です。家の壁面、京都では駐車場、いろんなどころで使っています。次第に商売になりつつあります。大阪市では、教室をやろうとしています。大阪工業大学でも考えていますし、引きこもり対策にも最高だと思います。また、このガラスおこしを天神橋筋商店街でやりたい。焼くのは電気の窯を持って行きます。100Vでもできますので、そういう教室を今たくさんさせてもらっています。商店街で是非させて頂いて、テレビやラジオで放送してほしい。



ガラスおこしは吸水性のあるタイルなので、道路にも使えます。大阪の東成区、住吉区、平野区、城東区を流れる川が汚いので、何とかしたいという話が市から出た時、「子どもらにタイルを作ってもらいましょう」ということになりました。夜になればタイルの中の蓄光が光って、違う風景に見える。子どもは川に対して親しみを持つし、環境教育にもなるということでさせていただいています。また、西成の生きがい事業団というところに、おじいちゃん、おばあちゃんの陶芸クラブがあります。大和郡山市の商店街などが中心となって瓶を集めてもらい、その瓶を砕いてガラスおこしのブロックを焼いて、床面に利用しました。

ガラスおこしについての汚れは基本的に落ちません。水を通すと飲めるぐらい透明度が増します。しかし、だんだん周りに菌が増えていきます。普通の紙だったら捨てるしかないのですが、ガラスおこしの場合、燃やしたら終わりです。300～400度の窯に入れれば、菌は

死滅しますが、ガラスおこしそのものには影響はありません。そういう利点があります。道路に敷く場合は、埃などが溜まってくるので、目詰まりはしてきます。それは致し方ないことだと思っています。

ガラスおこしのでき上がったものは、ガラス 100%です。ふつう植木鉢は、上から水をやりますが、ガラスおこしで作った鉢は下から水を吸い上げます。鉢がポーラス状態（格子状）になっているのです。隙間がたくさんあるので、コケ玉プレートなども簡単にできるのです。コケ玉ってすごく乾燥しやすい。だからコケ玉を作っても、すぐ乾燥して枯れてしまいます。下に水を保つ方法もありますが、下手に水を保つと腐ってしまう。ガラスおこしは、非常に水の保持力が高いので、「植物を置いておくといつまでも枯れない」という利便性があります。

私は、ごみを減量化させたいと思っています。廃ガラスは大阪湾に埋め立てると、満杯状態で1トン 8000円で埋め立てられています。しかし、ラオスに廃ガラスは3000円で送ることができます。ガラスおこしは、ガラスの粒をくっつけるために、結晶促進剤というのを使います。これも私が特許を取りました。こちらは、1トンあたり2400円で提供できます。ということは、実際必要な経費は5400円になり、十分計算に合うということになります。これは、儲けようと思っているわけではありません。何が言いたいかという、「先進国のごみを後進国に送り、後進国でごみではなく資源としてもう一回先進国に送り返す」という循環が起こる。ガラスとして生まれたガラス材が、埋め立てることなく、また生き返る。資源のリサイクルができるので、将来的に、ヨーロッパのごみはアフリカで、北アメリカのごみは南アメリカで循環させることができると考えています。そういうことが起こると当然、ノーベル平和賞が私のもとに来るだろうと思っています。



〈リサイクル方法の違い〉

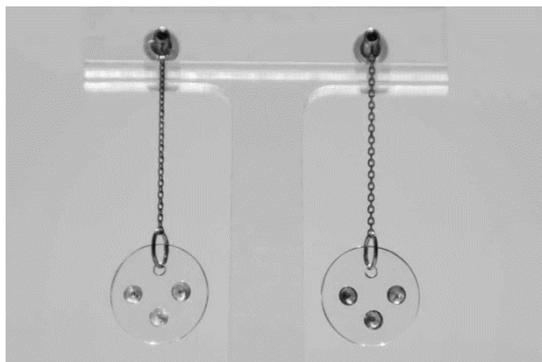
ガラスの廃材を樹脂と混ぜているものがあります。ガラスおこしとは全く違う。樹脂というのは環境に最悪で、私から言わせると、「ガラスに何すんねん」というものです。ガラスおこしはガラス 100%なので、リサイクルのリサイクルができます。樹脂とは、化石燃料です。ガラスおこしは「資源の資源化」ができていますので、埋め立てる必要がないのです。

〈高級ガラスのリサイクル〉

高級ガラスと言うものは、泡が少しでも入ったら使えません。始めの行程から作る時には、きれいなガラスができ上がっていく方程式はあります。しかし、リサイクルという行程になると、また違う性質のガラスが入ってくるので、もとの高級ガラスには戻りません。同じものにリサイクルができないのです。だから、ガラスメーカーとしても捨てるしかないのです。

テレビ画面を作る際に出る、ガラス片のリサイクルがあります。テレビは大きいサイズにガラスを切って作ります。そうすると、どうしても「へた」が出る。その「へた」部分は超高級ガラスなのですが、リサイクルができないのです。テレビを作っている会社から「何とかできないか？」と相談され、エントランスの受け付け台を制作しました。

大阪工業大学では、いつもガラスの廃棄物で何かできないかと考えています。新しく考えたのが「空中に浮くダイヤモンド」です。ガラスと言っても、性能によって種類は様々です。最高のガラスというのは、そこに「あるかどうかわからない」というものです。その最高級のガラスにダイヤモンドをはめ込んで、耳につけると、ダイヤモンドが浮かんでいるように見えるという発想で作りました。



5. ガラスの不思議

東日本大震災以降、原子炉の問題が取り沙汰されています。ガラスの世界でもウランを使うことがあります。ウランでガラスを作ると、それはきれいな色が出ます。昔、私はその研究をしていました。ウランガラスを使うと、マイナスイオンが出るような装置ができます。ガラスというのは珪砂の中に色々な鉱物を入れて作ります。だから、入れるものによってパソコンのガラスや窓ガラスなど、成分の違うものができるのです。どれも同じではありません。ベースは全部同じで、シリカです。ソーダガラス、鉛ガラス、クリスタルガラスとなります。ただこうした鉱物が 30%以上入ったものは貿易でやり取りできないなど、そういう規制もあります。

面白い話に「ローマの滅亡がガラスのせいではないか」という説があります。ガラスは、鉛をたくさん入れると温度が低くても作れます。例えば、1400度で加熱したガラスはものすごく高級なガラスになります。しかし、明日香村などで見られる古代ガラスは 800 度ぐらいで作られており、質のよいガラスはできない。そこで鉛をたくさん入れて、鉛 80%ほ

どのガラスにします。そのガラスで器を作りますが、鉛が 80%も入っているため溶出してくるのです。そして、鉛中毒になってしまう。「ローマが滅びたのは、それが理由ではないか」と言うのです。ガラスの技術が発展して、きれいなガラスが求められるようになると、イタリアのベネチアでは「ムラーノ島」という島を作って、そこにガラス職人を閉じ込めて、技術が外に漏れないようにしていました。

ところで、バカラの良さって分かりますか？ガラスの質がすごく良くて、ものすごくきれい。ところが、切子ガラスというのは、あまりガラスの質がよくないので細工をしているわけです。ベネチアのガラスも、質があまりよくないので金を入れたりして、赤色を出していく。しかし、バカラは何もしなくてもきれい。あの技術も、今は簡単にできるようになりました。あまり鉛が入っていないのに、質のいい、きれいなガラスができるのです。

6. アーティストとして

〈キラウエア火山とガラス〉

ハワイにキラウエアと言う火山があります。そこに、溶岩を吹きに行きます。溶岩を見ると、温度によって溶岩の色が違う。そのため、大体の温度が分かります。みんな違うものと勘違いしていますが、溶岩もガラスも一緒です。水あめのように溶岩を吹いて玉にして、それをまた取って、とテレビで見るようなガラスの作り方を溶岩でしようと思ってハワイに行きました。アーティストなので、商売でも何でもありません。ガラスって面白いでしょう？お金目的でも何でもなく、ただそういうのが好きなんです。

〈ガラスの繭計画〉

「ガラスの繭（まゆ）」と言うものを 1995 年に発表しています。地中に 50 アンペアの電極を差し込んで 30 時間経つと、そこは 1600 度ぐらいになります。そうすると、土は全部溶けてガラス化していく。地球を「ガラスの鍋」にしたかったわけです。そうすると、1 トンぐらいの繭状のガラスができます。それを 1 ヶ月ぐらいで取り出して、ピラミッドのように積み上げたい。出発点を熊野にして、奈良から京都、大阪、朝鮮に行つてシルクロードに行き、最終的にクフ王の横にガラスの繭を使って、ピラミッドを作りたいと思っていました。天神橋筋 3 丁目でできたガラスの繭と、熊野でできる繭とは微妙に色が違う。それを積んでいくというのをやりたい。もう、実験は終わっています。

ガラスの繭をやりたくて、1995 年に関西電力にお願いしました。景気が下向きになってきたことで実現はしませんでした。いつかしてやろうと思っています。100 歳まで生きたとして、まだ 43 年ほどあるので何とかできるかな？それが「ガラスの繭計画」です。アーティストとして、2 度と同じ作品は作らないし、誰もしたことがないことをやりたいと思っています。

〈障がい者施設での活動〉

施設には、やっぱりアーティストがいます。ここにはすごく上手に焼く天才が何人もいます。10人いたら、絶対1人は天才がいます。絵を描かせると、写真で見たままの絵を描きます。例えば、働く車、クレーン車を描くのですが、会社の電話番号から車番まで、全部きれいに描いています。けれど、彼らが描く場所が、広告や汚い紙の裏に描いている。それではアートとして売れません。そこに指導員みたいな人が入って、描くものなどを準備していくと、もっと商品になっていきます。

今でも、ある施設では面白い絵を描く子がいます。いろんな風景などを描くのですが、全部ティーポットが描いてあって、その絵はすごく面白い。そういうアーティストを引き出す人が必要です。アーティストというのは、作品で勝負できる。こういう子にガラスおこしの絵を描いてもらって、それが地面にあたり壁にあたりと、いろんなことができてくる。今はその下準備をしていきたいなと思っています。そのためには「基地」が必要なのです。

ガラスおこして、割とやり易いと思います。だから、一般の人にも広げていきたい。私は、作業所が「知的障がいの子が作った」と謳って販売するのがすごく嫌です。何か買わないといけなような、変な被差別感に打たれる。アートの世界では、ノーマライゼーションがあるべき世界。本人ではなく作品で勝負できる、そういう世界です。

8. おわりに

私は、2〜3歳の時からガラスに触れてきました。初めにも申しましたが、自宅の前がガラス屋でしたから。その店では、ミカン箱にガラスのくずを放り込んでいました。それが太陽にあたると、キラキラととてもきれいに見えました。その箱の中からガラス片を取っては、しょっちゅう手が切れていました。それでも、遊ぶものを作るために、ガラス片をダイヤモンドカッターで切るわけです。

隣は鍛冶屋でした。鞆（ふいご）で吹いて叩いて、鉄をのばすわけです。鉄のにおいがするし、ガラスのにおいもするし、その隣の大工の家からは木のにおいもする。私の周りには、材料が何でもありました。職人ばかりのところでしたから、職人がどんなものか小さい時から分かっています。

私自身はアーティストなので、今やっていることはあまり商売っ気を前面に出していません。商売をしたい人を募って、その人たちで動かしているという状態です。今は建材屋などが賛同してくれていますので、今後2〜3年の間で広がっていけばいいなと思っていますし、広がっていくタイミングに来ていると思っています。だからこそ、このタイミングでガラス発祥の地でもある天満でガラスおこしを広げていきたい。町がガラスで栄えていってほしい、そう思ってもう30年くらいこの地に住んでいます。ガラスおこしで商売をしたいという人がいれば、私はどんどん技術を教えたいと思っています。